

氏名	鈴木 真貴子
学位の種類	博士 (音楽)
学位記番号	博音第188号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 Francis Poulenc 3 Moouvements Perpetuels (FP14), 8 Nocturnes (FP56), Improvisation (FP63) No1, 2, 7, 8, 13, 14, 15, Aubade pour piao solo (FP51) 〈論文〉 フランシス・プーランク ピアノ作品演奏法の考察
論文等審査委員	
(総合主査)	東京芸術大学 教授 (音楽学部) 角野 裕
(副査)	〃 〃 (〃) 片山 千佳子
(〃)	〃 〃 (〃) 渡辺 健二
(〃)	〃 准教授 (〃) 東 誠三

(論文内容の要旨)

フランス近代の音楽文化が日本に紹介されて既に久しいが、フランシス・プーランク (Francis Poulenc 1899~1963) の非常に個性的な世界は未だ十分に知られているとは言い難い。またその演奏法に関しても、口承的に受け継がれているプーランク作品独自の演奏法が臆げにその姿を確立されようとしているのだが、何が根拠となってそういった演奏のあり方が求められているのかという点があまり明確になっていないのではないかと私は疑問に思っていた。本論文は、そうした私の疑問と、これまでに多くのプーランクピアノ作品を演奏してきた際に抱いたプーランク作品の演奏法に関する疑問への一考察である。

演奏や作曲、もしくは芸術すべてにおいては、それを行う本人の今までの経験から得たすべての情報が、意識的にまた無意識の下にも強く作用すると私は考えている。プーランクがピアニストであった事、そして作曲する際には必ずピアノを使用していた点に私は着目し、彼のピアノ作品にはプーランクの無意識下におけるピアノ奏法の癖や好みが反映されていると考えた。従って第1章では先ず、音楽家プーランクのルーツともいえる、彼が施されたピアノ教育の様子を明らかにする。プーランクが最も影響を受けたと語る、師リカルド・ヴィニェスについては、彼がどういった人物であったかを探り、プーランクとヴィニェスの関係性を文献などから読みとった。そしてヴィニェスがプーランクに与えた影響が、プーランクの作品にもその演奏法にも大きく反映されていることが明らかとなった。特にペダルを多使用するというプーランク作品独自の演奏法は、このヴィニェスのピアノテクニックが根源となっていることが判明した。

第2章ではピアノ作品の演奏法に関してプーランク自身が残している言葉を対談集などから抜粋し、日本語に翻訳して考察を行なった。その結果、プーランクが自作品演奏法に対し、特にペダルの使用とテンポに関する事柄に、強いこだわりを持っている様子が明らかになった。また、彼は自身の思い描いていた通りの自作品の音楽が「プーランクの作品」として演奏され続けることを切に望んでいることが分かった。

第3章では、そうしたプーランクが望んだ音楽の姿を探る考察として、また前に述べた私の疑問点に関する考察として、9つの項目に対する検証をプーランクの自作自演録音を用いて行なった。作曲する際に必ずピアノが用いられていた事を考えると、プーランクの頭の中に鳴り響いていた音楽やメロディーは、プーランクの弾くピアノ演奏を通して具現化されていたことになる。つまり、プーランクのピア

ノ演奏から生まれる音楽のあり方が彼の望んでいた作品の姿に反映されているのではないだろうか。従って、その音楽のあり方を窺い知る1つの手段として、本章での考察には自作自演録音を使用した。第3章の内容は、アボジャトゥーラ、フェルマータ、コンマ、ボワン・ダレの実際的な解釈について、楽譜に指示されたメトロノーム数値の検証、プーランクの演奏におけるテンポ運びの特徴、ペダル使用法の考察、指使いの提案となっている。テンポに関する検証には、DAWソフトcubase4による自作自演録音の分析データから検出されたメトロノーム数値を利用し、プーランクの演奏におけるテンポの面においての傾向を探った。特に本章5節に渡るテンポに関する考察では、*sans ralentir*（遅くしないで）の指示に代表されるような、テンポの弛緩を演奏家に禁止するプーランクの強い意図や、テンポの弛緩を自作品に多用されることを好まなかったプーランクの姿が明らかとなり、作品を演奏する際のテンポ設定やメロディーのテンポの運び方にプーランク独自の演奏法が内在していることを推論した。またそのことは、演奏家に許容されるテンポ解釈の可能性を示唆することともなった。最後の第4章では、本論文で得られた結果をまとめた。

作品演奏というものとどのように向き合い、それを自身の中でどのように位置づけるかは、各演奏家それぞれで異なっている。しかし、作曲家の望む自作品への演奏法を知るためには、楽譜には書かれていない部分を学問的に研究・検証することが必要となる場合がある。本論文は、プーランク作品におけるそうした演奏解釈・演奏法への一考察であり、プーランクが演奏家達に強く望んでいたように、彼の理想としていた自作品の音楽のあり方から離脱しない解釈・演奏法を改めて示唆するものとなった。

（総合審査結果の要旨）

フランシス・プーランクの音楽は、近年は我が国でも演奏される機会が決して少なくないが、彼のピアノ作品を演奏しようとする者は、その譜面にいくつかの特異な指示が記されていることに戸惑う。その最たるものは、速過ぎて演奏が極めて困難であったり、音楽内容に比して速過ぎるのではないかと思われる、メトロノームによるテンポ指示であろう。また曲中にしばしば現われる、テンポの弛緩を禁ずる文言やペダルの多用の指示などもある。プーランクに特徴的な、フレーズの継続を不意に中断したかのような突然の遠隔調への転調の頻出に対し、機能と声的力学的関係に基づく時間的配慮をどの程度行うべきであるのか、という疑問も生じる。こうした、主として演奏の時間軸上の多くの事柄を、演奏者が自己の音楽的感覚のみで処理するのではなく、作曲家自身はどのような美意識を持って、どのような音楽像を望んでいたのか、ということを確認しようとしたのがこの論文の眼目である。

鈴村は、これらの疑問に対して、一つには残された作曲者の言説を自ら訳出しつつ多角的に検証することから、いま一つは作曲家自身の演奏をコンピューターソフトを用いて精緻に解析し、音楽のさまざまな局面の要素ごとにどのような時間的状况が見られるかを考察することによって答えを導いている。論考の進め方と、最新のデジタル技術を活用した研究は大変的確であり、プーランクの音楽的個性と彼の望んだ音楽の在り方が明確に示されたことは高く評価される。

演奏は、テンポを不必要に弛緩させることなく一定性を保持するという研究の成果を十分に生かしながら、本人の優れた音楽的センスと多彩な色彩感を使い分ける演奏技術の熟達さによって、情緒豊かで生き生きとした表情に溢れたものとなり、特にオーバードは場面の情景や主人公の心理を見事に描き出し、プーランクの魅力を十分に示した秀逸なものであった。

演奏系の博士論文として研究テーマの着眼が適確であり、手堅い研究手法によってプーランクの作品演奏のための1つの明確な指針を説得力を持ってまとめたことは大変有意義である。またその緻密な考察の成果と本人の音楽的自発性が有機的に結び付いた演奏の質の高さを評価し、「(削除)」をもって合格とする。